

文献紹介

山下琢巳 著

『水害常襲地域の近世～近代 天竜川下流域の地域構造』

古今書院 2015年1月 277頁

6,400円＋税

本書を紹介するにあたり、歴史地理学会掲載論文データベースで1980年以降の「河川・災害」をキーワードとする論文を検索してみた。ヒット数は20前後、全体総数からいえばかなり少なく、災害8（うち土砂1・火山1、残りは水害や水防）、ほかに河川環境、河川絵図などである。論文という性質上、特定年代と地域を扱ったものがほとんどである。著書になれば時間軸は拡大するが、本書のように「近世から近代」という長期間であること、地域構造の変化を考察軸にしたものは、あまり類例をみないように思われる。

著者は序章で既往の水害研究について、河川工学・災害史・地理学的視点と、地域構造論や地域変容との関連から整理している。特に時間軸の設定については、「地域構造の変化を主たる考察対象とする際には、時間軸を設定しながら地域を動態として捉えること、そしてその時間軸は、歴史の画期となる、いわゆる外的要因の作用自体の影響も再検討する必要があること、あるいは、地域の側からの新たな時間軸の設定も場合によっては必要となること」を残された課題とした。

これを踏まえ、歴史地理学的視点から、第一に「水害が頻発していた時代の地域構造」を復原することに加え、さらに「水害が発生しなかった年」も取り上げ、地域構造変化の特徴を描きだそうとした。さらに「外的要因」に、明治期の治水事業と鉄道の関連を設定した。

フォッサマグナ地帯にある天竜川上流域は、もろい地質と険しい地形をあわせ持ち、洪水時には支川から大量の水と土砂が一気に本川に流れ込み、水害を引き起こしてきた。また、天竜川は、東海道を横切る河川群のなかでも異色である。1950年代の水田と畑の比率は、大井川90：10、富士川66：34であるのに対し、天竜川は51：49であり、水田と畑がほぼ拮抗することにまず驚く。

本書の構成は以下となる。著者の分析の意図の理解のために節まで紹介する。

第1章 序章

第1節 研究の目的と視点

第2節 既往の水害地域研究とその課題

第3節 本書の方法と研究対象地域

第4節 本書の構成

第2章 天竜川流域の水害史

第1節 開発初段階の天竜川流域

第2節 被害頻発地点の変転

第3章 水害頻発期における天竜川下流域の存立基盤

第1節 流路の統合と下流域の開発

第2節 水害状況の復原と復旧の特徴

第3節 農業生産とその特徴

第4節 天竜川下流域における水防組合の意味

第5節 水害頻発期における地域構造

第4章 河川改修工事と天竜川下流域への影響

第1節 内務省直轄河川改修工事

第2節 土木工事専門業者の進出

第3節 水防組合の活動とその役割

第5章 水害減少期における天竜川下流域の地域構造

第1節 農業生産と村落構造

第2節 材木流通と天竜川の機能

第3節 水防組合の活動と村落組織

第4節 水害減少期における地域構造

第6章 天竜川下流域における地域構造

第1節 地域像の提示

第2節 水害常襲地域の再定義とその意味

第3節 今後の課題

全体構成は、第2・3章が近世、第4章以降が近代である。また時間軸の設定である外的要因として、材木流通と水防組合を置いていることがわかる。この全体構成を理解した上で、各章を紹介していく。

第2章は、まず天竜川の河川生態史ともいえるべき水害年表が提示される。近世以降年次が下る毎に残存資料の精度があがり、被害地点・区間・内容が詳細になる。昭和26（1951）年までを追った

年表には、著者の視点である治水工事の項目がある。

開発の進展は、右岸・左岸、北部、中央部、南部ごとに水害頻度の高低として現われてくる。治水工法である関東流から紀州流への転換も指摘している。幕末期以降、中央部と輪中地帯である南部における破堤被害の相関関係も論じている。

明治期以降は、詳細な資料から右岸の破堤状況をまとめた表があり、破堤間数や復旧工事が完了した日時が判明する。明治20年代になると、堤防の被害よりも新たに架橋された橋の流失という事態が起こる。明治18(1885)年から開始される内務省直轄工事は一定の成果を上げたが、明治44(1911)年水害を契機に、第2回目の内務省直轄工事が開始された。大正初年から順次着工された改修堤防にはコンクリートが使用され、現在まで天竜川下流域を守っているという。

なお、最後の堤防決壊で集落に被害が及んだのは、昭和20(1945)年であった。この原因は、前年の南海地震と戦時下の堤防養生の不備であった。決壊箇所は堤防に掘られた防空壕の横穴であったというのも、自然との相克を考える上で象徴的である。

第3章は、第6章と対になる本書の骨子である。17世紀後期とされる「浜松御領分絵図」のトレース図からは、本流路と増水時の河床がよくわかり、複雑で網状流を示す天竜川の河身を如実に描いている。惜しむらくは、縮小したトレース図の文字が読みにくいこと、おおよその縮尺があれば距離感がつかめたことであろうか。前章からの関連からいえば、彦成堤の位置も明示があれば、この図から得られる情報はより大きかったと思う。これは、著者のみならず絵図を扱う評者の課題でもある。評者は大井川や安倍川の河川絵図を散見したことがあるが、やはり天竜川は独特であるとの感を抱いた。乱流路の統合、旧低水路の締切は開発につながるが、ひとたび洪水時には旧状に復すのである。絵図をみてその脅威を新たにした。

また、この章では集落レベルの水害状況の復原と復旧の特徴を考察している。岡村の事例は、トレース図も大変わかりやすく、下畑が水害によって川成となることが一目瞭然で、地目から水害を想起できる。

さらに、水害後の再開発である「起返」にも力点が置かれ、天竜川の特質である土砂堆積の状況が克明に復原されている。元禄11(1698)年の史料では、一回の洪水で1mの土砂堆積が記録されている。「浜松御領分絵図」のトレース図に示された低水路が洪水によって土砂で満たされるのである。匂坂中之郷村における起返の考察も、天保5(1838)年絵図と明治7(1874)年改正地引絵図の対比で理解しやすくなっている。

水害常襲地域での農業生産の特徴は、畑による洪水の少ない冬作物の麦類・雑穀が主穀であった。夏季に栽培される商品作物である綿の順調な生育を可能にしたものこそ、地域にとっての存立基盤である水防組合であったとしている。

第4章では、明治期の河川改修を取り上げている。近世から近代を一貫して考察対象とする場合、史料の形態の変化や旧村統合などがあるため、同じ観点からの追跡が難しいと評者は感じている。同様な思いを持つ方も多いと思う。近世、近代と時代区分がされるのも、このことと無関係ではなからう。

著者は河川工学的視点で時間的経緯を追跡しつつ、土木専門業者の動きに着目した。河川の土木工事をさす「水制工」は、河川工学では自明の理であるが、他分野で扱う研究者はきわめて少なく、研究史の盲点になっている。明治26(1883)年の資料にみえる沈杵・菱牛などの水制は、各地域の環境に合わせて古来より行われてきた伝統的河川工法であり、材料には地元から調達できる竹や木材を使う。地域の中でのこれらの流通経路や普請の復原などは、評者を含めまさに歴史地理学が今後解明しなければならない課題である。天竜川水防組合長であった大橋の動きを追うことも、地域構造の解明に深みを満たせている。

第5章では、主要農作物であった綿から蔬菜への転換の変化に着目している。「遠州4品」といわれるヘチマ・ショウガ・トウガラシ・ラッカセイは、畑地の土性にあつた作物であった。明治末期には、「遠州4品」のどれかと、イモ類や蔬菜類に生産の比重を置いた農業が行われていた。根菜類に適した深耕法は、復旧工事として田畑に流入した土砂を起返する際に、流入した分の土砂を取り除き水害前の耕土面を地表に出した後、さらに地面を5尺ほど掘り下げ、流入した土砂を埋め

込んだという。この結果、地味の肥えた土が表土の下に取り込まれ、水害が根菜栽培に寄与したということも本書から学んだ。大正10(1921)年の温室の導入は地域構造に大きな変化をもたらしていくが、戦時下で壊滅的な打撃を受けた。

また、材木流通を、地域構造変化から考察している。天竜川本支流の合流点には「土場」と呼ばれる貯木と筏組を行う場所が点在していた。明治22(1889)年に東海道線が全通すると、材木は鉄橋の至近で陸揚げされ、同31年に天竜川駅開設されると引込線が敷設された。同42年には対岸に軽便鉄道が敷設され、運搬手段が劇的に変化する。

洪水時の河川沿岸への材木の漂着は、場合によっては堤防や水制工に過度な水圧をかけ、二次的な水害の要因ともなった。沿岸の住民は、減水すると堤防へ出かけ、漂着した材木を拾い集めたという。中には橋の上からモリで突き上げるもの、危険を顧みず中州に舟を出すものもいたらしい。帰属をめぐる両岸で争いも生じた。流出材の存在というのも天竜川ならではの地域特性であることを評者は改めて知った。

水害減少期の大きな特色は、堤防の築堤による天竜川の河道の固定である。すなわち「流路の統合は進んだものの、依然としてどの旧低水路が主流になるかはわからない」状況を脱したのである。自然堤防上の肥沃な畑地は、潜在的な農業生産力を発揮した。流路の固定化は、低水路に規定された「同じ自然条件を持つ下流域全体」から、「河道と堤防からの距離に応じた天竜川との関わり方」を生んだ。文章では理解しにくいだが、概念図はこの変化を端的に表現している。すなわち、村域に天竜川堤防を持たない村は、流失材木拾得の権利の喪失と、流通によって結ばれる天竜川中・下流域の関係からの離脱を意味した。このことは下流域全体の生活サイクル再編を加速させ、水防組合の形骸化を促進させた。

以上が章を追った本書の内容である。終章の著者の言葉を借りれば、「人と川の関係」を「水害時」と「平時」の人文地理学的事象を歴史地理学の視点から復原した本書の意義は大きい。「水害

時」の研究はあっても、「平時」との比較、それも長い時間軸での考察は、著者が設定した新たな視点であり、地道な分析の賜物である。今後の課題として、①近代化を捉える一指標として浜松市街を視野に入れた兼業農家の動向を地域構造に位置づけること、②他河川との比較と公共工事そのものの意味づけをあげている。歴史地理学の新方法として、今後の分析に期待をしている。

著者の意図するところを、人文地理学的現象に疎い評者が端的に伝えることができたのか甚だ心もとない。しかし、時間軸と空間軸を交錯させ、いくつかの外的要因を設定して復原した地域構造の変遷とその手法を、歴史地理学のみならず、近代史や土木工学など他専攻のみなさんにも読み込んで欲しい一書である。

付記 一あとがきに寄せて一

河川の研究は、人の一生に疑似しているように思う。河川研究が少ないのは、時代による呼称の違いや河道の変遷を、空間的に理解するには、長い時間とそれなりの訓練が必要で、すぐ結論を得られないからである。また、河川はひとつとして同じ顔つきをしていない。著者は、天竜川本線と東派川に囲まれたかつての川中島であった掛塚で体感した幼少時からの記憶が、研究に向かわせた契機だと書いている。事例を重ねて、地域構造へ結びつける作業は困難であったと思うが、反面薄皮をはがすような真実を知る楽しさがあったのではないかと勝手に推察している。また、論文作成の苦悩をザ・ローリング・ストーンズの鑑賞法を事例に書かれているくだりは、まさにその通りである。これから論文を書く若いみなさんに大いに参考になるだろう。

なお、著者は、2014年11月29日、木曾三川輪中地帯で行われた第237回例会(巡検)報告を、2015年3月の会誌274号に寄せている。評者も参加し、佐屋川の廃川敷に残る砂山にただただ圧倒された。評者は利根川で悶々としたが、とても木曾三川地帯に及ばないと、胸をなでおろしたことを思い出す。あわせてぜひ拜読されたい。

(橋本直子)